

会長就任の挨拶

オペレーションズ・リサーチにもっと光を

南山大学 教授 長谷川 利治



このたび、はからずも水野会長の後を受けて会長の大任を仰せつかり、その責任の重さに身の引き締まる思いをしております。もとより浅学非才の身で、しかも日本OR学会に対してなんらの貢献をしていない私が、果たしてその任に堪えうるかどうか、心配しております。なにはともあれ、最善を尽くしていく所存ですので、皆様方のご指導、ご支援を賜りたく存じております。

オペレーションズ・リサーチが脚光を浴びたのは、悲しいことといえるかもしれませんが、戦争によってでした。第2次世界大戦後、平和的な応用が始まり、多くの成果を各方面であげてきているといえます。しかし、重要かつ効果的な成果にも関わらず、オペレーションズ・リサーチの巷における認知度は、必ずしも十分であるとは思えません。それがなぜなのか、私見を述べさせていただきます。

まず、オペレーションズ・リサーチの研究や応用に従事している者としての立場からみてみますと、取り扱うモデルや手法の正確さや精密さを追求するあまり、間違いを犯すことへの過大なおそれを持っていること、したがって謙虚になり過ぎているのではないかとすることがあります。謙讓が美德ではなくなりつつある現代においては、人々に周知されるような努力をもう少し積極的にすべきです。ただ単に意思決定者の意思決定を支援するだけでなく、積極的に指導するくらいことはすべきであると信じています。

一方、意思決定を行う立場の人々にとっての問題を、我が国における政治・行政に携わる人々に

まつわる問題として考えてみます。そのような人々を十把一絡げにして論ずること自体は、オペレーションズ・リサーチの観点からは問題がありますが、少々大胆に考えます。我が国の政治的な意思決定を、選挙によって選ばれたのではない人々に任すということは、もちろん制度として間違ったことではあります。しかし、残念ながら実状はかなり重要な決定を彼らが行っているように観察されます。これらの人々が、オペレーションズ・リサーチの考え方や手法を応用していれば、もう少しはましな世の中になるものと、あえて言いたく思います。少なくとも「最適化の概念」を少しでも理解していればいいのに、と感じています。

それではなぜオペレーションズ・リサーチが、このような重要な局面に活用されないのかを考えてみますと、透明性が確保されることへの恐れではないかと感じています。意思決定過程が透明になり、外部からの正確な評価、解析、批判が可能になると、意思決定者にとって、都合が悪いと考えているように思われます。もしかしたら、過去の亡霊であるべき、「何も知らせず、頼らせるのみ」がまだ生き残っているのかもしれませんが。

このような観察からすると、これからもますますオペレーションズ・リサーチの適用の重要性が高まるものと信じられますし、私どもがさらに努力を続ける義務があるものと思います。「オペレーションズ・リサーチにもっと光を」をモットーに努力を続ける所存ですので、皆様方のさらなるご指導、ご支援をお願い申し上げます。